

立野ヶ原遺跡群

城端町には九〇ヶ所あまりの埋蔵文化財遺跡が確認されている。中地山・経塚野を含む立野ヶ原台地には、「立野ヶ原遺跡群」と呼ぶ旧石器時代の石器製作場所が確認されており富山県でも最古級の遺跡群と云われている。

旧石器時代は、今から四〇〇万年から一万三〇〇〇年前に至る間の猿人・原人の段階で人類史上最古の時代であり、立野ヶ原遺跡群は二万数千年前の後期旧石器時代のものである。

それは約一万年前〜四〇万年前に形成された箱根・富士火山帯の火山灰である関東ローム層はよく知られるが、二万五千年前に現在の桜島付近で大噴火が発生し、空中に吹き上げられた火山灰は偏西風に流されて北東へ広がり日本列島各地に降り積もった鹿児島県始良カルデラから噴出した火山灰の層が立野ヶ原にあるので年代がわかるのである。

立野ヶ原は地表から二〜三〇センチの所に、その始良カルデラの火山灰層があり、その地層の中か、その直下か

ら出土することが多い。

土器を使用するようになる縄文時代の前段階であり、人は狩猟や採集に生活基盤をおいていた。自然のサイクルにあわせて移動するので家屋跡や焚き火などの生活跡が発見されることはまれといわれる。立野ヶ原台地にも狩猟する石器の製作過程に出る石のくず（剥片）が出土しており、刃先だけを磨いてある局部磨製石斧や長さ二〜三センチの小型で寸づまりな形が特徴的な「立野ヶ原ナイフ」が大量に発見されている。



立野ヶ原型ナイフ

西原遺跡

縄文時代は約一万二〇〇〇年（紀元前一四五世紀）〜一万三〇〇〇年前（紀元前一〇世紀）に始まったとされ、弥生時代まで約一万年もの長い期間続いた。縄文時代が温暖化したので食糧源も豊富になった。縄文時代の特色である土器の出現は食糧の貯蔵や煮炊きが可能にした。安定した食糧供給によつ

て人は定住するようになり、ムラを形成するようになった。ムラは四〜五棟の堅穴住居で構成された。堅穴住居は地面を直径三〜四メートルの円形に掘りくぼめ、数本の支柱棟持柱に垂木を渡し、草木などで屋根をふく構造であり、中に炉が設けられた。面積は二〇平方メートル程度で四〜五人ほどの家族が住んでいたと云われる。

そのような生活をしてきた縄文人の生活が金戸・野口・千福の間に位置する示野にあつた。明治末期に立野ヶ原陸軍演習地増設にともない西原村から移住した住民が、地盛をした際に土器片などを発見したことから遺跡の調査が始まった。



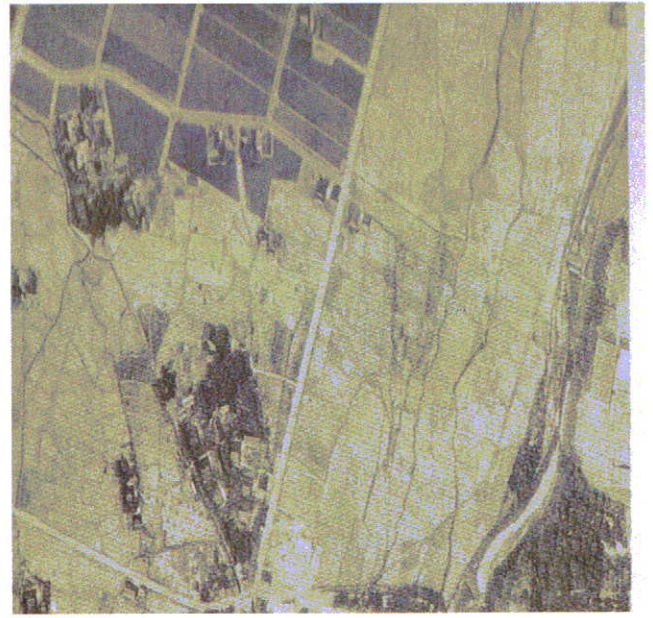
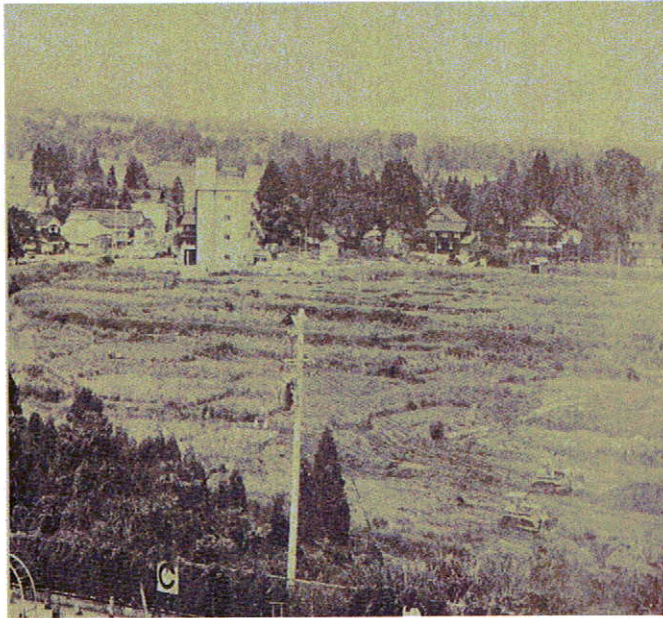
『城端町史』『城端町の歴史と文化』『西原遺跡第二次調査』によれば、大正一四年一月二五日から城端小学校訓導松田光一らによって最初の発掘調査が一週間程度行われ、縄文土器、石器などが出土した。大正一四年の発掘時は地名から示野遺跡と云ったが、昭

和三四年の『城端町史』には地域名から西原遺跡と呼ぶようになった。

遺跡は金戸・千福・野口の広範囲に渡るものであり、西原に限定される広さではないので、往古からの呼び名である示野遺跡の名がふさわしいと思われる。

昭和四八、九年に及ぶ第一・二次発掘調査において、県道城端駅野口線の東側（屋敷田辺り）と西側（示野新）に住居跡一棟が確認された。その中の屋敷田辺りの二区第五号住居跡はこの調査の唯一の完掘住居跡である。縄文時代の中期（約5500〜四五〇〇年前）に

金戸の屋敷田や示野新に縄文人の営みがあったことに思いを巡らすに悠久の歴史を感じざるをえない。



経塚

往古から南山田小学校の南側・南山田保育所西側に経塚があった。昭和四九年の基盤整備で無くなったが、小さい丘があったことを覚えていた人も多いであろう。明治三七年の立野ヶ原演習場地図や西原遺跡の発掘調査の附近図にも記るされている。

経塚とは経典が土中に埋納された遺跡である塚で、平安時代には浄土思想が普及し、末法の世が訪れるという末法思想から経典を後代に残そうとした信仰形態であったが、後世には供養塔の意味で築かれるようにもなった。

金戸の経塚は古老によれば家畜の埋葬場所であったと聞き伝えられていたと語っており、畜魂の供養として築かれたのではないだろうか。また字の記した扁平な小石（礫石）があったとも聞くので、経典の一字を書き納めた礫石経塚やもしれない。

